

福 井 県 医 師 会

だより

第717号 令和3年(2021)3月



明けない夜はない 福井市 平野 治和

表紙写真説明：明けない夜はない

福井市 平野 治和

絵などのアート作品をみて、「美しい、好き」とか「汚い、嫌い」と感じるのはなぜだろう。美は対象そのものに宿るのか、鑑賞者の側にあるのか、あるいは対象と鑑賞者の相互作用として生じるのかという議論が長く続けられてきた。神経審美学の提唱者である Zeki は、対象が普遍的な美を宿しているからではなく、対象を知覚する者の神経活動として美が感じられるという。美意識は時代で変わることもあるが、やはり「十人十色」の言葉のように、とりわけ個人的なものといえる。絵をみると、快（尾状核）不快（扁桃体）の情動が活性化されるといえるが、私の抽象画の場合は…。

醫 縫 録

理事就任の挨拶 — 福井県の腎移植医療 —

糖尿病・CKD 担当理事
福井大学医学部附属病院 医療安全管理部 教授

秋 野 裕 信



2019年6月に福井県医師会理事に就任しました。わたしは福井県の出身で、生まれは奥越の山奥、旧西谷村です。県医師会理事の先生方の中には藤島高校の同期生やクラブの先輩がおられ、高校は異なりましたが、共通の友人と共に東京大学の見学に行ったことがある先生もおられます。小学校で同級生だった郡市医師会長の先生とは医師会の会議で約55年振りに再会することができました。旧知の先生方と県医師会の理事会や委員会でお会いできたことを、うれしく思っています。

昨年は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に始まり、終息することなく、新年を迎え、第3波のさらなる脅威が福井県に襲来して来ていますが、この拙稿が皆様の目にとまる頃には、ワクチン接種に関する議論がされていることと思います。理事会に参加させていただき、県医師会が池端会長を先頭にCOVID-19対策を始め、諸問題に迅速に対応されていることを目の当たりにし、医療システムは流動的で不確実なものですが、レジリエンスを発揮する場合は県医師会の理事会にあること、そして、福井県の医療は医師会の先生方の自発的な献身的活動に支えられていることを実感いたしました。

わたしは福井大学医学部附属病院で医療安全担当の副病院長、医療安全管理部教授の任にありますが、元々は泌尿器科が専門で、県医師会では糖尿病・CKD 対策担当理事を拝命しました。わたしは2015年に医療安全管理部教授に就任するまで、腎移植に携わり、40例以上の腎移植、20例弱の死体腎提供者からの腎摘出を行いました。当初は腎移植後の管理は泌尿器科単独で行っていたのですが、泌尿器科医はいわゆる移植医ではなく、他の泌尿器科疾患の診療にも当たる中、限界を感じていた所に、腎臓内科教授として岩野正之先生が就任されました。岩野教授のご理解のもと、福井

大学病院における腎移植医療は腎臓内科と泌尿器科がチームとして連携し合うようになり、腎移植患者の免疫抑制療法等の内科的管理の質が向上し、患者さんにとって十分な移植医療を提供できるようになったと思います。医療安全管理部教授に就任後は、腎移植医療に直接携わっておりませんが、腎臓内科と泌尿器科のホームページを拝見すると、血液型不適合腎移植のみならず抗HLA抗体陽性腎移植にも精力的に取り組んでいます。

わが国における移植医療の医学的レベルは世界でもトップクラスにありますが、実際に移植の恩恵を受けることができる患者さんは、移植を希望する患者さんのごく一部に過ぎません。原因は臓器提供に関する意思表示の低さにありますが、そのような状況にある大きな要因は教育にあると思います。県の移植コーディネーターが、毎年2、3の高校で移植啓発のための講義を行っていますが、不十分なことは明らかです。何らかの抜本的な教育の改革が必要なのだと思います。日本臓器移植ネットワークは教育者を対象にした「今求められるいのちの教育—臓器移植を題材とした授業の可能性—」と題するセミナーを開催しており、このような努力の成果が現れるのを期待したいと思っています。腎移植によって多くの腎不全に苦しむ患者さんが救われることを希望して止みません。

わたしは、今年の3月末で福井大学病院を退職いたしますので、理事として県医師会に参加できる期間は残りわずかですが、退職後も福井県の医療に貢献したいと考えております。医師会の皆様には、今後ともご指導の程をよろしくお願い申し上げます。